

「愛の奉仕のために派遣される」

年間第 31 主日・A 年 (17.11.5)

仕えるために来られたイエス

まず、初めに今日の福音を振り返って見ましょう。

この朗読箇所は、マタイ福音からとられており、場面は、イエスが群衆に向かかって、律法学者やファリサイ派の人々を、あからさまに非難なさり、「彼らの行いは、見做ってはならない。言うだけで、実行しないからである」と、彼らを偽善者として手厳しく批判なさったところです。

そして、キリスト共同体のあるべき姿として、「あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ」。また、「あなた方の父は天の父おひとりだけだ。・・・あなたがたの教師はキリスト一人だけである。あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と締めくくっておられます。

ですから、キリスト共同体においてはまさにお互いがへりくだって仕え合うことが基本的土台であることを強調しておられるのではないのでしょうか。

ちなみに、マルコ福音における並行箇所では、ファリサイ派や律法学者の代わりに、異邦人のつまり、世間一般の共同体と、キリスト共同体とを比較し、イエスに倣って教会こそ奉仕の共同体になるべきことを、次のように強調なさっておられます。

「異邦人の間では、支配者とみなされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金^{みのしろきん}として自分の命を^{さき}献げるために来たのである」(マルコ) と。

イエスこそ、まさに、全人類の罪を^{あがな}購うために、この世に御父から派遣されたメシアであり、その基本的姿勢は、まさに徹底して、全人類のために生贄としてご自分をささげて、仕えるために来られたことを、強調しておられます。

つまり、御父の御子のこの世へ派遣こそが、全人類が罪から解放されるため

であり、さらに聖霊を派遣されて教会を誕生させられたのであります。

ちなみに、教会誕生の出来事は、使徒言行録の第2章1節から13節に荘厳に描かれております。

ですから、聖霊降臨の出来事によって、初めてキリスト共同体がエルサレムで誕生したことによってこそ、神の救いの歴史の新たな出発になったと言えますでしょう。

派遣を生きる教会

このように、聖霊の派遣によって、マリアを中心に弟子たちは一つに集められ共同体となり、まさに教会の土台を築いたのであります。

ですから、教会は、御父による御子の派遣に続いて聖霊の派遣によって、誕生したキリストの共同体にほかなりません。

今日、特に、この派遣されている教会の本来の姿を実践するため、教皇フランシスコは、自らしきりに、「出向いて行く教会になりなさい」と、次のように呼びかけておられます。

「今日、イエスの命じる『行きなさい』ということばは、教会の宣教のつねに新たにされる現場と挑戦を示しています。皆が、この新しい『出発』に招かれています。…つまり、自分にとって快適な場所から出て行って、福音の光を必要としている隅においやられたすべての人に、それを届ける勇気を持つよう招かれているのです」(『信仰の喜び』20項)。

確かに、わたしたちは、キリストを中心に集められた共同体です。しかも、イエスが強調なさるようにぶどうの木であるイエスに、わたしたちはまさに共同体ぐるみでしっかりとつながっていなければ、教会は成長することができません。

ちなみに、イエスは最後の説教で、このことを次のように切々と語られました。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなた方につながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。・・・人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネ 15.4-5)。

ですから、このミサこそ、ぶどうの木であるキリストとその枝であるわたしたちが一体となって、感謝と賛美を天の御父にささげることができる、まさに、教会活動の源泉であり、また、頂点を体験していると言えましょう。

つまり、このミサにおいてこそ、キリストを、^{かしら}頭としわたしたちがその体としてしっかり結ばれている姿を最も美しく表しているのではないのでしょうか。

福音を携えて派遣されて行く

そして、このミサの終わりには、派遣によって共同体を、それぞれの家庭、学校、職場や地域などに広げていきます。つまり、集められた共同体は、また派遣によって出向いて行く教会になっていくのであります。

ですから、イエスは、最後の説教で次のように弟子たちを派遣なさいました。「あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものはなんでも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」(ヨハネ 15.16c-17)。実に、福音を伝えるという使命を担って派遣されていくのです。ちなみに、福音の中心は愛の掟にほかなりません。ですから、福音を伝え、あかしするのは、まさに愛の掟の実践を広げてくことと言えましょう。ですから、まず、愛を最も必要としている人たちを優先的に尋ねるべきではないのでしょうか。実は、先日の文部科学省の2016年度の「児童生徒問題行動・不登校調査」によりますと、前年度に比べ、いじめが1万842件も増え、4万2016件となり、不登校は559件増え9002件、しかも、宮城県は児童生徒1000人当たりのいじめの件数が全国で3番目、さらに不登校の割合が全国でもっとも高かったのであります。わたしたちの身近なところに、愛に飢え渴いている子どもたちがいるという現状を踏まえるならば、なんとかして彼らに次のような愛のメッセージを届けることができないのでしょうか。

「神は存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われぬ。憎んでおられるのなら、造られなかったはずだ。神が御望みにならないのに存続し、神が呼びだされないのに存在するものが、果たしてあるだろうか。命を愛される主よ、すべては神のもの、神はすべてをいとおしまれる(知恵 11.24-26)。今週もまた、派遣されるそれぞれの場で、愛のあかしができるよう共に祈りましょう。

「愛の宣教者になろう」

年間第 30 主日・A 年 (17.10.29)

^{こんにち}今日の奴隷の家からの解放

^{きょう}今日の第一朗読は、旧約聖書の二番目の書物にあたる『出エジプト記』からの抜粋であります。その内容は、イスラエル共同体において守るべき具体的な掟を説明している箇所と言えましょう。

とにかく、紀元前に 400 年にわたってエジプトという大国においては下層階級に属し、徹底して差別され、搾取されていたイスラエル人はヘブライ人とも呼ばれていたのであります。ですから、その時代の彼らの悲惨なありさまを、この書物の冒頭で次のように報告しております。

「エジプト人はそこで、イスラエルの人々の上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待した。・・・しかし、虐待されればされるほど彼らは増え広がったので、エジプト人はますますイスラエルの人々を嫌悪し、イスラエルの人々を酷使し、・・・彼らが従事した労働はいずれも過酷を極めた」(出エジプト 1.11-14)。

このような悲惨な民族の状況は、^{こんにち}今日、まさに地球規模で広がっているのではないのでしょうか。民族浄化や差別意識は根深く残っています。また、少数民族は搾取され国外追放という残酷な迫害をも受けています。ですから、内戦が続く国々で増え続ける難民に対する具体的な援助を、それぞれの国でどのように分担すればよいのか、教皇フランシスコは、「難民問題は、決して対岸の火事ではない」と、具体的な支援活動と呼び掛けておられます。その証として、バチカンにも難民の家族を受け入れました。

とにかく、難民たちだけでなく、例えば、日本では、仕事を求めて来日している外国国籍の労働者も増え続けていますが、具体的に教会としてどのような援助活動ができるのかを、課題の一つにすることができないのでしょうか。

ですから、^{きょう}今日の第一朗読では、^{こんにち}今日、まさに地球規模で寄留者に対する愛の実践を命じていると読み取ることができると言えましょう。

いじめのなくなる社会を目指して

ところで、先週の27日の『河北新報』の朝刊の第一面で、いじめ宮城ワースト3位：16年度文科省調査：不登校割合1位と言う見出しで、次のように報道されました。

「文部科学省が26日に公表した2016年度の児童生徒問題行動・不登校調査で、東北6県の国公立小中高校と特別支援学校が把握したいじめは、前年度比1万842件増え、4万2016件となった。暴力行為は小中高校では708件増え2888件、不登校は小中学校で559件増え9002件。児童生徒1000人当たりのいじめ件数は宮城が全国で3番目、山形が5番目に多く、不登校の割合は宮城が全国で最も高かった」と。

けれども、教育の現場で増え続けるこのような深刻の問題に対する解決への取り組みについては、新聞には、全く何も報道されていないというのが現状です。

ですから、まさに草の根運動として、まず愛のあふれる家庭を築き、また、教育の現場における児童生徒に対する徹底した愛の実践教育の徹底など、まさに、教会が愛の宣教者となって「互いに愛し合いなさい」という愛の掟を伝えていく使命を、今こそ実践すべきではないでしょうか。

イエスは、最後の晩餐の席上、最後の説教として、わたしたちに、次のように切々と語られました。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。・・・あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残る様にと、また、わたしの名によって父に願うことは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」(ヨハネ 15.12-17)。

確かに、教会活動の源泉であり、頂点はこのミサにほかなりません。

ですから、愛の宣教者となって、それぞれの家庭、職場、地域にミサによって派遣されるのであります。つまり、ミサの終わりは、派遣された教会活動の開始に広がって行くのであります。すなわち、集められた共同体は、ミサによって派遣された共同体になって広がって行くのであります。

具体的には、ミサでいただいたイエスのおことばを携えて、出向いて行く教

会になって行くことにほかなりません。

愛の掟の実践を呼びかける宣教

また、今日の福音は、旧約時代から実践されて来た最も重要な掟として愛の掟を、律法の専門家にイエスがお答えになられた場面となっておりますが、ヨハネ共同体が書いたとされる手紙では、神の愛がキリストによって最高の方法で示されたので、わたしたちも互いに愛し合うことによって、神の愛がわたしたちの只中で全うされることを次のように見事に宣言しております。

「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から溢れ出るもので、愛する者は皆、神から生れ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちも生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見たものはいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです」(一ヨハネ 4.7-12)。

たとえば、いじめが原因で、不登校になり引きこもっている中学生にこの愛のメッセージをとどけるために、わたしたちはまさに出向いて行く教会にならねばなりません。決して、閉鎖的の内輪集団にならないように、ミサによって毎週派遣されるのではないのでしょうか。

しかも、福音を告げ知らせることは、この愛の福音を伝えることにほかなりません。特に心の傷がうずいているため、自分の殻に閉じこもり、生きて行く気力もなくなり、自死を選んでしまうようなことがないように、まさに、タイミングよくこの愛の福音を届ける責任を担っているのではないのでしょうか。

今日、また、改めて派遣されるそれぞれの場において、確実にこの愛のメッセージを伝えることができるように共に祈りましょう。